

〔曲名〕 1°.Quartetto Originale

第一「四重奏曲」ト長調 作品76番

〔曲種〕 Quartetto

プレクトラム四重奏曲

〔作曲者〕 C.Munier

カルロ・ムニエル

〔編曲者〕

ムニエルの純粋プレクトラム四重奏曲が三つあることはあまねく知られているが、そのうち二長調と八長調のそれは現存の出版社マウリが扱っているのでよく親しまれている。然し最初の本四重奏曲ト長調は出版社フォルリヴェージは代が変わり絶版になっているので収録した。本曲が出版されたのは1903年であるが、既に1892年ジェノヴァで開かれた国際作曲コンクールで賞状と金牌を授与されており、

1890年にフィレンツェで最初に組織されたプレクトラム四重奏団によって演奏された。

このメンバーはルイジ・ビアンキ（第一マンドリン） グィード・ヴィッツアーリ（第二マンドリン）  
リッカルド・マティーニ（マンドラ）

カルロ・ムニエル（リュート）でビアンキの急死後は第一マンドリンにムニエル、第二マンドリンにロ  
ンダルリ、マンドラにピザーニ、リュートにカジーニが当たった。

出版政策の上から十種類の楽器編成で出版されたがオリジナルは上記リュートを加えたプレクトラム四  
重奏曲と見るべきで、

ピアノ或いはギターを加えたものは当然便宜上のもので作者が意図したものでないことは明らかである。

リュートをマンドロンチェロに代えることは殆ど原曲を損なわないが、ギターに代えるのは多くの矛盾  
を見出す。

然し作者自身が敢えて書いているので便宜上総譜の最下段に書き加えておいた。

マンドロンチェロはリュートの最高弦を欠く形になるので和弦では最高音を欠くことになり低音部記譜  
に書き改められなければならない。

本曲はマンドリン音楽の擁護者（ようごしゃ）であり作曲家、評論家として知られたガバルド・ガバル

ディ伯爵に献げられた。

ここで作者ムニエルの作品表を掲げたいのであるが龐大（ぼうだい）に亘（わた）るので之を次の機会にし、

今まで日本で発表されていないムニエルの論説を紹介しておきたい。

ムニエルの論説として本邦で発表されているのは1907年 4月イル・コンチェルト誌に載った「コンサート楽器としてのマンドリン」「マンドリンの将来」

及び1906年 6月モナコで開かれた国際コンクールに審査員として出席したムニエルが行った演説の要旨の三つである。

之はムニエルの親しい友であり同志であるファンタウツイが主宰するマンドリン音楽研究誌「ル・プレクトル」の1909年12月号に寄せられたもので、

死の2年足らず前に執筆されたものになる。

原文はファンタウツイによって編集されたと見るべきフランス語であるが幸い数年前小西誠一氏を煩わして訳して頂いたのがあるので之をそのまま掲載する。

之により新たに知り得たものが数あるので非常に貴重な一文である。

他の論説にも出るが「意見以上の意見」とか「自然以上の自然」とゆうような言い廻し方は意味として素直に入りにくいがそのままとした。

猶多くの人名についても注釈を附すとよいが余りに長くなるので省略した。

〔マンドリンの愛好家と擁護者 カルロ・ムニエル〕

私の意見は単なる一つの意見以上のものである。

それは絶対的確信であって、近い中にそれに根拠があることが明らかにされるだろう。

私は常に繰り返して云う。

「マンドリンの合理的な、完全な学校が音楽のコンセルヴァトワールと学校（インスティテュート）（若しくは研究所）へ、

異論のない価値を持つ楽器と相並んで採用せられ、オーケストラは既に前から多くの種類の楽器による豊かさを持っている集団の中に光彩ある、

効果の豊かな、新しい色彩としてマンドリン四重奏を喜び迎え入れるだろう。」

マンドリン芸術によって極めて短時間の間に作られた道は可なりはつきりして居り、絶えず増大する進

歩に対して明白な保証を与えている。

つまるところ何が動くことを止めるだろうか。

芸術、科学、労働、産業、思想、真理が何日も進展し、その目のくるめく様なスピードの進展を何物も停滞させることがない。

そしてあらゆるものの中に科学の破産、芸術の衰退、進歩の展開力の死のあることを叫ぶことが出来ると思うのは最も愚かしいイリュージョンのさせる業である。

この栄光ある未来は同様マンドリン芸術の運命である。

……若しその擁護者と愛好家がそのために努力することに倦まず（やすまず）、常にその健全な理由のために働き且つ（かつ）主張するならば。

しかし私は心の強靱（きょうじん＝柔らかで強い）さと強固さを以て目的を真直ぐに見守りながら多く努力せねばならないことを知り、確信している。

私は後悔をしないと同時によい模範を示したと云ってもいいだろう。

とゆうのは30年以上闘い、決してそれに倦むことがなかったから。

その間私は殆ど意気阻喪する程幻滅を感じたこともあった。今日私は最早若くない。

けれども若かった時代の逞し（たくまし）さを持ち続けた。

そして私の旗じるしをしっかりと支えている。

私は人々が私を空想家、何の役にも立たない幻想家と呼んだのを承認する。

けれども今日は鼻先よりも少し計り先の時代に対して目があいている人々の考えが正しいことを慧眼（けいがん＝眼識の鋭いこと）な人が認める時代である。

以上に云ったことを証明するために映画に於ける様にマンドリン芸術のまわりに集まった総ての栄光ある名を目の前を通らせた。

それは完全な名簿ではない。

とゆうのは外国でのマンドリン運動に於ける人々の名を集めることが出来たならもっと沢山の名が登録されることになるから。

私は立派な名前を挙げよう。

その一方名簿を充実させるために努力を続けねばならない。

ここに私が集めた名を知ったならば人々はマンドリンが歴史、真摯（しんし）な擁護者、愛好家を持たないと私に向かって云うことが出来るだろうか。

先ずモーツァルトの「ドン・ジョヴァンニ」の中の有名な小夜曲から始めよう。

この曲ではマンドリンはオーケストラの中で最も独特な形で現れる。

この名作曲家は総譜に対して歌のマンドリン助奏（オブリガード）とゆうパートを結び附けたからである。

それより少し前にバッハが「受難曲のオラトリオ」の中にリュートを使った。

それは指で揠かれる古代リュートで、栄光ある歴史を持ったこの楽器は流行の楽器として復活されたのである。

ベートーヴェンはマンドリンのためのオリジナルな二つのソナティナを書いた。

[実は四曲あった] それは多分彼の時代の愛すべきマンドリニストを讃えるために書いたのだろう。

けれども全くそれはベートーヴェン的である。

次に私は栄光ある名を列べよう。

「オテロ」のヴェルディ、幾度となくマンドリンの効果を役立てたマスネ、「シベリア」のジョルダーン、

我々にとって [マンドリニストにとって] 真に評判の高い作曲家スピネリは「南の港」の前奏曲で大成功を博した。

この曲ではオーケストラの中でマンドリンが弦楽器と管楽器の控え目な輪郭に伴奏されて輝かしく際立った。

天才的な「ピエロの物語」のコスタ、オーケストラの中にマンドリン四重奏を使った「聖ルチア」のトスカーヌ、

対位法の見事なナポリのD. アリエンツォ、「ペルギーノ」のマンチネルリ。

もしマンドリンの強力な擁護者になろうとするならば戦闘的なベルリオーズの云う所に耳を傾ける可きである。

『揠弦楽器の中で現在単独で演奏せられるのはハープだけである。

マンドリンは劇場以外では余り使われない。

「ドン・ジョバンニ」の他は。

モーツァルトがこのオペラの小夜曲のために書いた伴奏を奏かせるに当たって人々は殆ど常に困惑する。

その際大作曲家の考えが尊重されないことが多いために一つのフレーズをカットすることが必要であるかの様に見える。

つまるところ殆ど総てのオーケストラに於いて例外なしに —— パリーのオペラに於いてさえ ——

古くからの慣習になっていることはマンドリンのパートをヴァイオリン（複数）のピッツィカートか、ギター一つで演奏し、それ等の楽器の音色が要求せられた美しさを欠くことを理解しないことである。而もモーツァルトは主人公の好色的な歌の伴奏にマンドリンを選ぶことが彼の目的達成をもたらすことを知っていたのである』

それより先の所で彼はバッハの「オラトリオ」にリユーティストが使われないことを残念としプレクトラム楽器や撥弦楽器の研究が見捨てられていることを嘆いて、最後に叫んでいる。

「音楽院（コンセルヴァトワール）の役目は保存することではないのか」

マンドリンについては芸術のために貴い二つの名が結び付けられる。

それは二人の有名な芸術家でイタリア王立音楽院の教授である。

即ちミラノのラ・スカラ・オペラの演奏会の著名なディレクターであるヴィットリオ・マリア・ヴァンツォと

フィレンツェの著名なハーピストであるジョルジオ・ロレンツィ教授である。

この二人の芸術上の最高権威は我々の芸術の擁護のための言葉を推し進めることに労を惜しまなかった。

そして最近公にされた種々のアーティクルは彼等に対して尊敬以上のものをもたらした。

コモのコンクール(1906年)の時トリノ音楽学院校長であり、作曲家指揮者であるマエストロ・ボルゾーニはチルコロ・ディ・クレモナの抜群な演奏に驚嘆し、

それ以来熱心なマンドリンの擁護者になった。

モナコに於いては著名な音楽家兼指揮者のヴィアレは大がかりなコンクール(1906年)の後で催された晩餐会で堂々たる演説でマンドリンに対する好意を示した。

その際私自身も私の理想に対して乾杯したのだった。

ブローニュ・シュール・メールではもう一人の勝れたフランス音楽家ギルマン先生がマンドリン音楽に対して甲を脱いだ。

そして最近フランスで開かれたコンクールに大作曲家ヴァンサン・ダンディーが審査委員長を勤めた。

ギリシャに於いてはアテネ・マンドリナタのために有名な歌劇作曲家スピロ・サマロが我々の音楽の進歩を賞讃した。

そして我々はアテネ学校の校長マエストロ・ニコラス・ラウダスに対して心からの賞讃を送ろう。

フィレンツェの王立音楽学校の上級作曲家の教授で対位法学者であるスコントリーノ氏は

私のマンドリン・セロ・ピアノのためのイ長調の三重奏曲（このコンビは室内楽のための新しい試みである）を喜んで聴いてくれた。

ピアニストで著名な作曲家で、フィレンツェ王立音楽学校教授であるマエストロ・デル・ヴァルレは多分まだマンドリン党には改宗しない様であるが

雑誌「ラ・ヌォヴァ・ムジカ」にプレクトラム楽器のために四重奏曲やスタイルの正しい作曲を書いたムニエルは大に激励すべきであると書いた。

博識な音楽評論家でフィレンツェ音楽学校の図書館長であるマエストロ・ボナヴェントゥーラはマンドリンの擁護者でフィレンツェの新聞の中で最も権威のある「ヌオヴォ・ジオルナーレ」に書いた種々のアーティクルの中で我々に非常な好意ある意見を発表した。

音楽評論家で天分の豊かな作曲家ガバルディ伯爵は我々の音楽の賞讃者であり、擁護者である。

私はここで可成り広く親しまれている名、高貴な心、マンドリンの熱心な擁護者、熱愛者ガストーネ・ディ・ミラフィオーレ伯爵について述べたい。

私は経歴上多くを伯爵に負っている。

最近私は芸術上の共感的な喜び、彼の助力によって得られた喜びを彼から与えられた。

それは昨年（1908年）10月6日にソンマリヴァ・ペルノの歴史的なお城でイタリア国王の御前で演奏出来たことである。

私は陛下から握手を給り、マンドリンに対するお褒めの言葉を頂いた。

（私は自作の二長調前奏曲と演奏会用マズルカー一番を奏いた）

こうして私はヴィクトル・エマヌエル三世とゆう貴い名を擁護者の中に加えねばならない。

そして同様人々は国王の母君マルゲリータ女王を付け加えることが出来る。

女王は大変教養の高い婦人で細心な勇敢さを以てマンドリンとギターを学ばれた。

我々はイタリアで長足の進歩をしたマンドリン音楽に対する大きな愛を女王に負っている。

そして栄光の行列がそれに続く。

無敵のチルコロ・ディ・クレモナの幸運なディレクターポーリ、今一つの勝れた楽団チルコロ・ディ・コモのカッペルレッティ、

ジェノアのエストゥディ・アンティーナの賞讃すべき創始者で真の芸術家であるオノラート・ロッシ、彼は私のト長調の四重奏曲をフルオーケストラと共に演奏することを試みた最初の人である。

結果は素晴らしくパヴィアのコンクール（1909年）の審査員は彼に賞讃の投票をした。

それらに続くのはヴェロナ、パヴィア、トリーノミラノのエストゥディアンティーナの勝れたディレク

ター達

並びに私が加わっているマルセイユ楽団の私の心から賞讃するジェラルドである。

前に述べた作曲家達の栄光に他の人々を私は加える。

それは難しい程度のマンドリン音楽の純粋な芸術のための作曲家達である。

天分の豊かな洗練されたメロディストのファンタウツイ、一頭地を抜いたチャンピオンのナポリのカラーチェ、

芸術家らしい情熱的な心の持ち主だったが余りに早くその理想を奪われたフィレンツェのマルチェリ、ヴァレンティン・アプト、フィリオリニ、ローマのベルトウッチ。

合奏曲の作曲家としては完全無欠な曲のデリケートな作曲家サヴォイア、リッツイ、ジェラルド、ファンタウツイ、二人の巨人ブランツォーリとグラツィアーニ・ワルテル、

専門のマンドリン音楽家ではないが我々の音楽に対する直観を持った作曲家アマディ、ビルリ、マティーニ、ムッソ、マネンテ。

有名なヴィルトゥオーゾは、余りに突然芸術から奪い去られたビアンキは非常に高いクラスの素晴らしい芸術家になったに違いない。

私は彼がヴェータンの「ポロネーズ」を光彩燦然（こうさいさんぜん）として演奏したのに対して抱いた感嘆を思い出す。

彼は1890年に私が作ったフィレンツェ四重奏団（その種類の初めてのアンサンブル）に加わった。

ローマのクルティ、彼は1892年ジェノアのコンクールで賞牌を得た。

ファンタウツイはエレガントで、有名なコンチェルティスト（程度の高い独奏家）で、彼の芸術に情熱を持ち、フランスで効果的なプロパガンタを勤める。

唯一人の抜群なリューティストで、マンドロンセロでベリオの協奏曲を奏くことを楽しみにしているナポリのカラーチェ。

二人の非凡なコンチェルティスト・ロッコとラニエーリ —— 彼等の偉大な離れ業を知るためにはその演奏会の曲目を見さえすればよい。

そして廻転されるフィルムは最近催された主なマンドリンコンクールを続けて展開することが出来るだろう。

それは光の放射の様に芸術界を明瞭に見せるだろう。先ず最初は1892年ジェノアのコンクールであって、今までなかった新しい出来事だった。

ローディ、モルタラ、（そこで第一回マンドリン会議が催された）ヴェローナ、ヴィチエンツァ、コ

モ、パヴィア、

外国ではトゥーロン、トレント、モナコ、ウイーン、ボーン、イエール、ブローニュ・シュール・メール等々。

それら総ての重要なコンクールが新しい合奏団と新しいチャンピオンを生み出した。

さて以上色々な状況を明らかにした人々はマンドリンの破産を考えようとするだろうか。

いやノンである。

全くの所少しの心、良識の種を持つ人は我々の進歩の証明を否定出来ないし、否定してはならないだろう。

私はこのアーティクルを重要であり、公にしたいと思う宣伝文を以て結びたい。

「来たる1910年私のイニシャティヴによって有名なクレモナのエステュディアンティーナがフィレンツェで公開の大演奏会と王立音楽院に於ける芸術的演奏会を開く。

後者には芸術上の名士達によって作られた委員会が出席し、招待されたそれらの委員は彼等の所識を述べる。

その所感はマンドリンの未来を如何にすべきかを決定するために大きな重要性を持つだろう。」

1970年11月30日発行

イタリアマンドリン百曲選第9集より